

2 令和3年度 研究主題

(1) 研究主題

人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育

(2) 研究主題について

① 研究主題設定の背景と社会科教育の課題

これからの
社会の見通
しと、予測
される課題

近年では、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近なものの働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされています。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により一層先行きが不透明な「予測困難」な時代になってきています。社会全体のデジタル化、オンライン化が急速に進み、学校教育を支える基盤的なツールとして、ICTは必要不可欠なものになり、GIGAスクール構想の実現への動きも加速しています。このような状況の中、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われています。目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論していくことなどが大切になってきているといえます。

そこで、これからは今まで以上に、子ども自らが「人、もの、こと」などの社会的事象と主体的にかかわり、人の営み（社会や文化）を通して社会的事象の意味を理解していくことが大切であり、社会的事象の意味や価値を考え、選択・判断し、よりよい社会をつくっていくとする子どもを育てる社会科教育の役割は一層重要になってくると考えます。「学習指導要領総則」では、以下のように述べられています。

～人工知能が自ら知識を概念的に理解し、思考し始めているとも言われ、雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらすのではないかと予測も示されている。このことは同時に、人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということの再認識につながっている。

このような時代にあって、学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。
(平成29年告示 小学校学習指導要領解説 総則編)

学習指導要
領について

つまり、これからの社会科教育に期待される役割は、社会の変化に対応するという受動的な姿勢ではなく、変化を前向きに受け止め、人の営みに学びつつ、感性を駆使し、将来のあり方を選択・判断する力を培うことであると考えます。

昨年度から、新しい学習指導要領が全面実施となりました。社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきたといった時代背景を踏まえた上で、学習指導要領では、教育課程全体を通して育成する資質・能力を、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」の三つの柱に整理しています。社会科の目標や内容についても、

この三つの柱に基づいて再整理しています。子どもたちが、学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していく必要があります。そしてその取組において求められているのが「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善です。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の具体的な視点として、中教審答申では次のように示されています。

- 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- 子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。（中教審答申）

さらに、このような学びを実現させるためには、子どもたちの協働的な学びと個を大切にしたい学びを充実させていくことが大切です。

これらの視点に立った授業改善を行うことで、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けられるようにすることが求められています。

また、学習内容・活動に応じたふりかえりの場面を設定し、子どもの表現を促すようにすることがより一層求められます。これらのことを総合すると社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識（以下、概念的知識と表す）を獲得するように学習を組み立てなければならないのです。

評価については、学習指導要領に示す目標や内容「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう人間性」をそれぞれ、観点別学習状況の各観点として「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」とし、子どもたちの学習状況を分析的に捉えることとしています。

「知識・技能」では、各教科等における学習の過程を過した知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかを評価します。

「思考・判断・表現」では、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価します。

「主体的に学習に取り組む態度」では、「学びに向かう力、人間性」のうち、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意味的な側面を評価します。（国立教育政策研究所教育課程研究センター『学習評価の在り方』より）具体的には、学習過程に沿って、社会的事象について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追究・解決しようとしているか、よ

社会科教育
に求められ
ていること

りよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとしているか、という学習状況を捉えるようにします。また「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などは観点別学習状況の評価や評定には示しきれないものとして、個人内評価の対象とし、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童生徒に伝えることが重要です。（『学習評価の在り方』より）

高度情報化社会においては、社会的事象を深く洞察し、社会を形成しているしくみや法則、人々が生活の中で積み重ねてきた文化や歴史等を理解していくことは、自らが社会人になってよりよい未来をつくる基礎になると考えます。今回の審議のまとめには次のように記述されています。

各教科等において習得する知識や技能であるが、個別の事実的な知識のみをさすものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含むものである。

例えば、“何年にこうした出来事が起きた”という歴史上の事実的な知識は、“その出来事はなぜ起こったのか”や“その出来事がどのような影響を及ぼしたのか”を追究する学習の過程を通じて、当時の社会や現代に持つ意味などを含め、知識相互がつながり関連付けられながら習得されていく。それは、各教科等の本質を深く理解するために不可欠となる主要な概念の習得につながるものである。そして、そうした概念が、現代の社会生活にどうかかわってくるかを考えさせていくことも重要である。基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容（特に主要な概念に関するもの）の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できることが重要となる。（平成 28 年 8 月 26 日 文部科学省「審議のまとめ」より抜粋）

また、学習指導要領総則には次のように記されています。

「その際、ここでいう『知識』には、個別の事実的な知識のみではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものが含まれていることに留意が必要である」（平成 29 年告示 小学校学習指導要領解説 総則編）

学んだことを社会や生活に生かす学習過程を考える上で、教材の研究を通して子どもが身に付ける「概念等に関する知識」を明確にしていくことが大切です。また、「何ができるようになるか」（育成をめざす資質・能力）、「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）、「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）「何が身に付いたか」（学習評価の充実）を考える中でも、社会における様々な場面で活用できる知識を獲得する学び方を意識していくことが大切になります。

現在の社会
科教育のあ
り方

これからの時代に求められる資質・能力を視野に入れば、社会科では、「社会とのかかわりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し、知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸問題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸問題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育ていくこと」（中教審答申）が求められています。

それを踏まえて、社会科の教育目標は従前の目標の趣旨を勘案して「公民としての資質・能

力」を育むことを目指し、その資質・能力の具体的な内容を「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で示しています。

「知識及び技能」

- ・社会生活に関する理解

(地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化、それらと人々の生活との関連)

- ・社会的事象について調べまとめる技能

(社会的事象に関する情報を適切に集める・読み取る・まとめる技能)

「思考力・判断力・表現力等」

- ・社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力

- ・考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力

「学びに向かう力・人間性等」

- ・よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度

- ・多角的な考察や理解を通して涵養される自覚や愛情等

(地域社会の一員としての自覚、地域社会に対する誇りと愛情、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚)

学習指導要領では、この3つの柱にもとづいて目標や内容が整理され示されています。

また、これらの資質・能力全体にかかわるものとして、「社会的な見方・考え方」があります。「社会的な見方・考え方」は、学習問題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法」です。小学校の社会科においては、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して社会的事象等を捉え、比較・分類・総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりして考えることが「社会的な見方・考え方」に視点の例として示されています。この「社会的な見方・考え方」を働かせ、学習問題を追究したり解決したりする活動を通して、上記の3つの柱で整理した資質・能力を育成していくことが求められています。

社会の現状を見ていると社会問題や政治に関して、なかなか自分とのかかわりで考えられなかったり、無関心だったりする姿が多く見られます。しかし、これからの世の中をそれぞれの人が幸せを求めて生きられる世の中にしていくためには、一人一人が社会の一員だと自覚することが出発点です。その上で、社会を創っているのは自分だという認識をもち、自ら社会に参画していくことが望まれます。そうした国民を育てていくために、社会科教育は今後も大きな役割を担っていくと考えられます。

② 横浜市小学校社会科研究会（以下、市社研）がめざす社会科教育

過去4回の
全小社神奈
川大会での
テーマ設定
について

これまで、過去4回の全小社神奈川大会（以下、全小社）が開かれました。昭和56年度には「社会における自らのあり方を確かなものにしようとする子どもの育成をめざした社会科教育」、平成7年度には「共に生きる社会をめざし、自らのあり方を問い続ける社会科教育」を研究主題に設定し研究を進めてきました。当時の時代背景を踏まえながら、どちらの大会でも社会科について「人間相互のつながり」や「人間の働きの素晴らしさに目を向け」「人間の心の温かさを感じながら」といったことが研究の視点に入れられ、人々の営みを学習対象とする社会科の本質と、現代につながる課題を意識した研究が進められてきました。そして、平成21年度はこれまでの研究を深化させ「社会とのかかわりを実感し、自らの生き方を問い続ける社会科教育」を主題として神奈川の考える社会科教育を全国に発信することができました。めざす子ども像の一つに示された「人のつながりを大切にし、社会の一員としての自覚をもつ子ども」は、現代で大切にしなければならない「よりよい社会の創り手」となるために必要な資質であり、神奈川の取り組んできた社会科は、まさに「人」を中心に据えてつくられてきたと考えることもできます。昨年度（令和2年度）は、これまでの成果を踏まえ、「人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育」という主題を置き、これからの社会を生きる神奈川の子どもたちが「身に付ける資質・能力」を明確にして、副主題を「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」としました。日常の生活や社会とのかかわりの中で学んだことをどのように生かしていくかということが、よりよい未来を創造していく子どもの育成につながるという神奈川の考える社会科教育を全国に発信することができました。

このように、私たちは一貫して、共に生きる社会の創造をめざして、変化する社会のなかで人間相互のつながりを強め、人権を尊重するとともに、自らのあり方、さらには生き方を問い続ける教育を重視してきました。

個の学びを
大切に
してきた市社研

これまで市社研では、「授業記録をおこす」「座席表」「抽出児」などの研究のアプローチにも表れているように、「個」を大切にしながら学習を構成してきました。個々のものの見方や考え方は個性的であるという立場に立ち、個の変容や個の問いを大切にしてきたという点は、市社研の社会科の大きな特徴だといえます。社会的事象に対して子どもがもつ疑問や問題意識などから学習問題が「子どもの言葉」でつくられ、その解決に向けて調べたり考えたりして追究する学習過程は、子どもを意欲的、主体的にし、知識量の差を超えて思考する機会をつくってきました。その中で、子どもたちは社会的事象に対する個々の見方や考え方を深めたり広げたりすることができ、そうした学習を創りあげてきたことも、市社研の特徴です。審議のまとめでは以下のように述べられています。

～対話的な授業については、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型をめざした技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それらを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しをめざすものである。

（平成28年8月26日 文部科学省「審議のまとめ」より抜粋）

上記にあるように、「一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すこと」は、市社研が取り組んできた「子どもが社会的事象に主体的にかかわる」「子どもが自分の言葉で語る」ことができていなければならないことです。こうした実践を今後も大切にしていきたいです。

市社研で大切にしたいこと

一方で、以下の点において課題も見られました。そこで、全小社では、この課題をもとに、研究を深めてきました。

○個々の見方や考え方や個の理解など、個に即した学習に重点が置かれすぎて、社会科の内容やねらいから離れた学習過程になってしまうこともあった。

○「自らのあり方」「自らの生き方」が強調されてきたため、学びの評価が、個の変容に偏ってしまい、社会科としてどのような資質・能力が身に付いたのか、評価できていないこともあった。

社会科教育の質的向上を図るため、この現状を見つめるところから課題を探ると、次のようなことが言えます。

まず、市社研では、「様々な問題に対して、自らのあり方を決定し、対応する力を培っていく」こと、また、「人間相互のつながりがもつ意味の大切さを知り、人間関係をよりよいものにするための自らのあり方を問い直す」こと、「社会生活において、自ら考え、判断する力を基に基本的人権を尊重する態度について自らのあり方を問い直す」ことなど、「自らのあり方」を培うことを重視してきました。さらに、価値観の多様化の中で、自分らしさの確立をめざす一方、「自らの価値観だけで判断せず共に生きる社会の一員として互いに認め尊重する態度の育成」をめざしてきました。

その中で、子どもたち自身が学習に対して見通しをもって学習を進めるとともに、主体的に学びを進め、学んだことを社会や生活に生かす学習過程が大切であると考えました。このような学習過程を考える中で、「単元を見通す学習問題」と「本気の学習問題」を設定し、それぞれの学習問題についての吟味を行ってきました。

また、子ども一人一人を具体的にみつめ、子どもたちにとってより切実感のある学習になるよう授業改善を図り、問題解決的な学習を柱として取り組んできました。同時に、様々な教材開発を行うとともに、授業研究や授業実践を柱とする市内の研究交流を進めるなど、研究の充実を図ってきました。その結果、問題解決的な学習を柱とした授業改善が着実に進められ、子どもが主体的に学習に取り組む姿勢はみられるようになってきました。そして、昨年度の全小社神奈川大会を通して、何をどのように学ぶかといった学習の見通しをもつことや、学んだことをふりかえり、そこから考えたり身に付けたりしたことを社会や生活に生かしていくような学習過程のあり方について研究を深めることもできました。

さらに、教員経験が10年未満の教員が教員全体の半数を超える時代となり、社会科をどう指導していったらよいかよく分からないという声も聞かれるようになってきました。そこで、授業で大切にしていきたいことを明確にしながら、学習を子どもの生活とつなぎ、生活の中から夢や希望を育てたり、具体的にどのような資質・能力を身に付けさせていくのかといったことを明らかにしたりすることが肝要であると考えます。

③ 市社研がめざす身に付ける資質・能力

市社研がめ
ざす、子ど
もたちが身
に付ける資
質・能力

昨年度行われた全小社では、社会科の学習を通して、将来にわたりどのような力が身に付くのか、神奈川子どもたちが「身に付ける資質・能力」を設定しました。現在や予測不可能な未来において、目指すべき生き方は多様かつ個別であり、一言で表現することはかえって誤解を生じます。むしろ個々に合った生き方を形成していく上で必要な「身に付ける資質・能力」を具体的な目標にしていくことが大切であると考えます。

これを受けて、これまで述べてきた研究主題設定の背景、社会科教育の課題、市社研の研究の成果と課題から、子どもたちが身に付ける資質・能力を全小社で設定したものと同一ものに設定し、今後も研究を通じて検証、明確化を図ります。

○社会的事象（ひと、もの、こと）に主体的にかかわり、自ら問いを見つけ、人の営みを理解していく力

○社会的な見方・考え方を働かせて、社会的事象のもつ意味や価値を多角的に考え、感性を駆使して選択・判断する力

○共に生きるよりよい未来を創造するために、学んだことを社会や生活に生かし、これからのあり方を問いつける力

市社研では、3つの力を以下のように考えました。

自らの問い
を見つけ、
人の営みを
理解してい
く力

社会的事象（ひと・もの・こと）に主体的にかかわり、自らの問いを見つけ、人の営みを理解していく力

現在のように経験値があてにできない予測不可能な社会において、社会や生活は日々、目まぐるしく変化していきます。子ども自身がその様々な変化に積極的に向き合い、興味関心を深めて、自ら社会に対して問いかけないと、課題を見つけることや社会とかがかわることが十分にできないまま、生きていくことになりかねません。社会の主体的な形成者として育つためにも、様々な変化や情報を見極め、よりよく生きていくためにどのような問題解決をしていけばよいのかを考えるために、人の営み（社会や文化）を通して社会的事象の意味や価値を理解する力を身につけていくことが大切です。

- ・社会的事象に対して興味・関心をもち、自ら問いをもつ
- ・問いに対して、予想や学習計画を立て、問題解決の見通しをもつ

感性を駆使
して、選択
・判断する
力

社会的な見方・考え方を働かせて、社会的事象のもつ意味や価値を多角的に考え、感性を駆使して、選択・判断する力

今回の学習指導要領の改訂で、『社会的な見方・考え方』は社会的事象を見たり考えたりする際の視点や方法」と定義されました。言い換えれば、学びを深めていくための視点や方法が「社会的な見方・考え方」ということです。特に社会科では、時間、空間、人間相互の関係などの視点に着目して社会的事象を捉え知識を構築していくことが求められています。つまり、社会的事象のもつ意味や価値を多角的に捉えるために子どもの時間、空間、人間相互の関係などの「社会的な見方・考え方」を育成していくことが大切と言えます。

さらに、市社研では、人に寄り添うために想像力や感性を働かせることも大切にしてきました。人は社会の中で生活を営み、個々の生き方をつくりあげていく上で、様々な選択や判断を行っています。その選択や判断に至った考えや生き方に迫るために、市社研では、様々

学んだことを社会や生活に生かし、これからのあり方を問い続ける力

な資料を基に実践してきました。今後も想像力や感性を駆使しながら、人の営みに迫る学習過程を大切にしていきます。

- ・社会的な見方・考え方を働かせ、多面的に学習問題を追究・解決する
- ・社会的事象の意味や価値を、完成を働かせて人と出会い、人の営みを通して考える

ともに生きるよりよい未来を創造するために、学んだことを社会や生活に生かし、これからのあり方を問い続ける力

市社研では「ともに生きる社会を目指し、自らのあり方や生き方を問い続ける子どもの育成」に力を注いできました。これは、変化の激しい社会の中で自らのあり方や生き方を確立するために、必要な能力や知識を自らの主体的な行動や意志で学びとることを目標に取り組んできた横浜の社会科のあり様を示しているものです。

- ・獲得した概念などに関する知識や技能を、これからの生き方に生かしていこうとする
- ・社会に見られる課題に関心をもって、自らの社会への関わり方を問い続ける

④ 研究主題のとらえ

これまで次の点について述べてきました。

- ・これからの社会科教育に期待される役割は、社会の変化に対応するという受動的な姿勢ではなく、変化を前向きに受け止め、人の営みに学びつつ、感性を駆使し、将来のあり方を主体的に選択・判断する力を培うことである。
- ・市社研では、共に生きる社会の創造をめざして、変化する社会のなかで人間相互のつながりを強め、人権を尊重するとともに、自らのあり方、さらには生き方を問い続ける教育を重視してきた。
- ・一人一人が社会人として自立し、自ら社会にかかわる姿勢が育っているかという点、また、その途上である。
- ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、個の学びの充実と、協働の学びの充実のバランスととってることが大切であること。

今後は、一人一人の子どもの学びを保障していくために、どのような資質・能力が育成されているか具体的に評価し、個々にとって効果的な学びのスピードや方法を考え、集団の学びとどのようにバランスをとっていくのか、学習過程を考えていく必要があると思われます。何をどのように学ぶかといった学習の見通しや、学んだことをふりかえり、そこから考えたり身に付けたりしたことを社会や生活に生かしていく力が育つような学習過程の研究をさらに深めていくことが大切だと考えます。

そこで、研究主題を引き続き、次のように設定します。

人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育

人の営みに学ぶ

人の営みに学ぶということ（人の営みに学び、生きて働く知恵を獲得する）

前述のように、子どもが実社会に参画する頃には、グローバル化やAI技術の進展等、社会的現象が大きく変貌していることが予測されます。それは同時に、人の生き方や文化、豊かさや社会のあり方等、を深く考えていくことがより大切になってくると考えられます。

今後は、「どのように社会や人生をより豊かなものにしていくか」という社会科教育の目標を探究し、人の営みに学ぶことが求められます。

「人の営みに学ぶ」とは、人の営みを学び、多角的な見方・考え方を養うとともに、一方で「人に」学ぶということでもあります。その人を通して見えてくる、社会や産業、歴史等の関係性やしくみなどの概念を形成していくことだと考えます。

例えば農業学習において「人々の工夫や努力」が学習対象となっている場合、生産に取り組む個人の営みに学びがとどまるのではなく、農業の盛んな地域の共通点や差異点、産業のあり方等へ学びが発展していくことが必要です。

さらに、感性を働かせて社会的現象のもつ意味や価値を考え、実社会に参画している人の選択や判断に学ぶことが求められます。統計的・客観的な資料を読み解く中で、その裏側にある人々の思いや願いを感性的に理解していく、深い洞察力の育成が欠かせないと考えられます。

目に見える社会的現象から目に見えない社会的現象を探究、分析する資質・能力の育成が基礎になって、その後の社会をより豊かに創造していく力の育成につながります。

未来を創る子ども

未来を創るということ（学びに向かう力、人間性を育む）

市社研のテーマにある未来を創る子どもとは、小学校の社会科授業の中で社会に働きかけるような行動を目標とするものではなく、よりよい社会の創造に向けての主体性や人間性、価値観の多様化や少子高齢化等の社会問題に向けて進んで社会と関わり、持続可能な社会の実現をめざす態度の育成を目標としています。

社会とかわりがもてない人や格差等が社会問題となっている今、人間関係力や自分と異なる価値観を大切にしながら関係性をつくっていく態度、多様な情報を適切に活用、選択、判断し、目的に応じて自己の考えや思いを表現できる力や態度、国際社会の一員として我が国の伝統や文化を正しく理解し、異文化の人々とも協調・協力していく態度の育成が大切です。

これらの今日的な課題と向き合い、主体的にかかわり、協働的に解決していく、国家・社会の形成者としての必要な公民的な資質の基礎を養うことが、未来を創る子どもを育成することであると考えます。

そこで、社会科教育でめざす公民的資質については、日本人としての自覚をもって国際社会に主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現をめざすなど、態度形成も視野に入れ、次のように整理します。

公民としての資質・能力

- 社会的現象に対して、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度
- 多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚
- 世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚